イチゴの夏秋どり品種

1．試験のねらい

本県のイチゴは全国一の生産を誇っている。しかし、このイチゴの生産は促成栽培の作型で主要な出荷期が11月から5月までである。

そこで当分場は、イチゴの周年栽培に向けて、県北の夏季冷涼な気象を活かした夏秋どり（7月～10月）栽培に適する品種を検討した。

2．試験方法

品種の検討は、分場内の雨除けハウスで、一季成り性及び四季成り性の両品種を使って行った。

一季成り性の品種は女峰を供試し、夜冷処理の開始時期を5月21日、6月5日、6月20日、7月4日の4処理区で、花芽分化後に定植した。

また、四季成り性の品種は、サマーベリー、みよし及びエバーベリーの3品種を4月中旬に定植して検討した。

3．試験結果及び考察

(1) 一季成り性品種

女峰の花芽分化に要した日数は、夜冷処理の開始期によって若干の違いがあるが各処理区とも26日前後であった。また、夜冷処理の違いによる収穫始期は、5月21日処理が8月15日、6月5日処理が8月26日、6月20日処理が9月10日、7月4日処理が9月30日であった。

出蕾花房数は各処理区とも1次のみで、その後の出蕾は11月以降であった。このため可販果は低収量であるとともに、1果重の平均値も小さく、また奇形果率も高かった。

(2) 四季成り性品種

開花は各品種とも4月上旬から始まり、その後も連続的であった。また、この収穫始期は6月上旬からで、品種による差がなかった。

月別の可販果収量は、各品種とも6月から7月に多く、その後は少なくなった。しかし、各品種の総可販果収量は、サマーベリー＞みよし＞エバーベリーの順で、サマーベリーは220 kg/a、他の品種はこの半量以下であった。

品種の果形は、サマーベリーが円錐、みよしが長円錐、エバーベリーが球円錐であった。食味は各品種とも酸味がやや強かった。

4．成果の要約

一季成り性品種は、花房の出蕾が1次のみで収量が低いので夏秋どり栽培に適しない。これに対し、四季成り性品種は、花房の出蕾が連続的で収量も比較的高いので夏秋どり栽培に適し、特にサマーベリーは可販果収量(220kg/a)が高いので期待できる。しかし、この品種の食味は、酸味がやや強いので業務向きと思われる。

（担当者　黒磯分場　吉原　泉）

表－1　女峰の花芽分化及び可販果収量

夜冷処理開始期 月.日	花芽分化期 月.日	花芽分化所要日数 日	収穫始期 月.日	月別可販果収量 kg/a 8月	9月	10月	合計
5.21	6.18	28	8.15	9	0	0	9
6. 5	6.29	24	8.26	2	1	0	3
6.20	7.18	28	9.10	0	3	6	9
7. 4	7.28	24	9.30	0	3	23	26

表－2　四季成り性品種の可販果収量

品種	月別可販果収量 kg/a 6月	7月	8月	9月	10月	合計	一果重の平均 g	果形
サマーベリー	33	125	17	21	27	223	10.6	円錐
みよし	47	62	11	0	3	123	8.6	長円錐
エバーベリー	37	51	8	5	6	107	10.4	球円錐